

和歌が生まれるとき

——同志社大学歴史資料館所蔵二条家文書を 紐解いて

同志社大学文学部国文学科助教 大山和哉

はじめに

同志社大学文学部国文学科助教の大山和哉と申します。本日私からは、「和歌が生まれるとき－同志社大学歴史資料館所蔵二条家文書を紐解いて」というタイトルで、和歌が人の手によって作られる時に、人はどういうことを考えていたのか、というメカニズムについてお話ししたいと思います。

まず大前提として「和歌とは何か」ということを確認しておきます。和歌で用いられる言葉は「歌語」と言いますが、その古くからの「歌語」を使って、57577のリズムで作られた歌を、本発表では和歌と呼ぶことにします。最古の歌集は奈良時代の『万葉集』で、その後、和歌は、平安、鎌倉、室町、江戸と時代が移り変わっても人々に親しまれてきました。それが明治時代に入ると、正岡子規や与謝野晶子といった歌人たちが作る近代短歌というものに変わります。57577の形は同じでも、用いる言葉や詠み込む内容が全く違いますので、近代短歌は和歌とは区別して考えます。

典型的な和歌として、画面には江戸時代に作られた百人一首のかるたの画像を出してみました。同志社大学が所蔵している『百人一首かるた』からの画像です。これは在原業平の歌で、右の札

が歌の上の句と業平の肖像画、左の札が下の句です。「ちはやぶる神代も聞かず竜田川からくれなゐに水くく



るとは」。竜田川という川の上に紅葉が散り敷いて流れていく風情を詠んだ、和歌の代表選手と言って良いかと思います。

さて、現代でも親しまれているこの和歌について、ここからは次の3つの問いに答えていく形で進めます。1、「和歌はどうやって伝えられてきたの?」。古い時代に作られた和歌がどうやって現代まで残ってきたのかを考えます。2、「和歌はどうやって作られていたの?」。歌人が和歌を作るときの様子を、古い資料を元に考えます。3、「和歌の面白さって何?」。和歌の面白さはどこにあるのか。以上の3点です。

1 和歌はどうやって伝えられてきたの?

早速、一つ目の問い「和歌はどうやって伝えられてきたの?」を考えてみます。さきほど、江戸時代の百人一首かるたの例を見ましたが、これは現代でも、競技カルタのように読みやすい形に生まれ変わって親しまれています。ちなみに我が故郷、北海道では、板に筆で文字が書かれた「板かるた」を使います。普通の百

人一首かるたは上の句を読んで下の句を取りますが、板かるたは下の句を読んで下の句を取ります。和歌を暗記しなくて良いので簡単そうですが、その分、取り札がくずし字で書いてありますので、最初は何が書いてあるのか理解するのに一苦労です。

他にも現在まで伝わる和歌の作品は色々とあります。さきほども言いました、最古の和歌集である奈良時代の『万葉集』。それから平安時代に天皇が命令して作らせた『古今集』。大体西暦900年くらいに作られています。この『古今集』が非常に重要な歌集で、後の時代には和歌を学ぶためのもっとも基本的なテキストになります。そこから時代が下って鎌倉時代に入ると『新古今集』という勅撰集も作られます。『古今集』から『新古今集』までの間にもたくさんの歌集が作られていますが、今は省略します。それから『新古今集』の編纂者でもあった藤原定家が、個人的に百首の名歌を選んだのが『百人一首』です。このあたりの作品は、みなさんにもなじみ深いのではないかと思います。

ただ、これらの有名な和歌作品は、大体、奈良から平安、鎌倉あたりまでのもので、現代までかなり間があきます。ではその間、新しい和歌や歌集は作られなかったのかというと、そんなことはありません。一般にはあまり知られていないだけで、非常にたくさん作品が作られています。

たとえば、安土桃山時代のころの武将、豊臣秀吉も和歌を詠んでいます。画面に出しているのは和歌の短冊ですね。ここには「はつゆきを」という題で「月に散るみぎわの庭の初雪をながめしままに千歳ちとせへぬらん」とあります。月明かりが見える中、ちら

ちらと降ってくる初雪を見ていると、千歳（千年）もの長い年月もあっという間に過ぎてしまうよ、と詠んでいます。最後には「ひでよし」とひらがなで署名もしてありますね。戦に明け暮れていた戦国武将も、こうして教養として和歌を嗜んでいたわけです。

また和歌はもともと貴族とか、お坊さんとか、身分の高い武士といった人たちの文学でしたが、江戸時代になると本がどんどん出版されるようになり、もっと多くの方が和歌に親しめるようになっていきます。江戸時代にはすでに古典になっていた『古今集』なども出版されていますし、『類題和歌集』という本のように、江戸時代に編纂されて出版された歌集もあります。『類題和歌集』は江戸時代までに作られた様々な歌集から3万首近くも選び出した本です。『古今集』は全部で1100首ですので、26、27倍入っています。こういう本で和歌を勉強して、実際に自分でも和歌を作ったりしていたわけです。

現在でもいろんな和歌の本が出版されていますが、それに加えて実際に古い言葉を使って和歌を詠むという文化も残っています。同志社大学のお隣さんにあたります冷泉家さん、百人一首を作った藤原定家をご先祖に持つお家柄ですが、こちらは代々和歌の家として現代でもお弟子さんに和歌の稽古をなさっています。古い言葉を使わなければ和歌になりませんから、言葉をしっかり勉強して、季節の風物の美しさなどを57577で表現するというお稽古をされているわけです。

急ぎ足の説明でしたが、和歌が伝えられてきた様子について、

ここで少しまとめてみます。まず、「有名な和歌や歌集が古典となり、書き記されたり出版されたりして残ってきた」という「モノ」としての事実があります。またそれだけではなく、「それぞれの時代に和歌を詠む人々がいたことで、『生きた文化』として伝えられてきた」という「コト」としての側面も重要です。和歌は、ある一時期にだけ流行したものではなくて、昔から現代まで新たな和歌を作り続けることで、その精神が人を仲立ちとして伝えられてきたといえます。これは前者の要素が「物」として伝えられてきた和歌と言えるのに対し、左の要素は「心」として伝えられてきた和歌といっても良いと思います。古い和歌を見て、「ああ、いい歌だなあ」と思う、そうして自分でも「いい歌を作ろう！」と思って歌を詠む。こうして和歌の世界というものが継承されてきた、人が和歌の心を伝えてきたというポイントを、ぜひおさえてください。

2 和歌はどうやって作られていたの？

(1) 「にじょうけもんじよ二条家文書」とまさこ栄子内親王

それでは次の問いにいきます。二つ目、「和歌はどうやって作られていたの？」。ここが今回の話の中心になる部分ですが、この話に入る前に、お話ししておきたいことがあります。実は昨年四月に、同志社大学内に「宮廷文化研究センター」という、天皇や公家くげの文化に関する研究を行う組織が作られていまして、私もその研究員として研究を行っています。この宮廷文化研究セン

ターでの主な活動として、同志社大学が所蔵する「二条家文書」の調査が行われてきました。今回はその「二条家文書」の資料を使って和歌が生まれる瞬間を見てみたいと思います。

同志社大学所蔵の二条家文書というのは、天皇に仕える公家達の中でも摂政や関白に任じられる高貴な家柄である「ごせつげ五撰家」の一つ、「二条家」に伝来した資料群です。主に江戸時代の文書、典籍、絵画資料が残ってしまっていて、実は先月、7月を通して、その「二条家文書」の中の和歌に関する資料の展示を行っていました。こちらはもう会期が終わってしまいましたのでご覧いただくことはできませんが、今回はそちらで展示しなかった資料を使ってみたいと思います。

今回見る資料は、「二条家文書」のうち、「まさこないしんのうわかえいそう栄子内親王和歌詠草」という資料です。「栄子」と書いて「まさこ」と読みます。これは、栄子内親王という女性が、とある和歌を詠んだ時の資料です。今日は時間の都合で多くの資料は見られませんが、この資料一点をじっくり読み解くことにします。

そもそも栄子内親王というのはどういう方かと申しますと、江戸時代の半ばに、れいげんてんのう霊元天皇という天皇がいらっしゃいました。定期的には松尾芭蕉とか、井原西鶴とか、近松門左衛門といった人たちが活躍していた時代です。その奥さんである中宮にしんじょう新上西門院という方がいて、その二人の間に生まれたのが栄子内親王。この栄子内親王は当時の二条家の当主、つなひら二条綱平という方と結婚します。非常に高い身分であった、この栄子内親王が和歌を詠んだ時の資料を見てみたいと思います。

(2) 栄子内親王の「杖」歌が生まれるとき

先ほどの資料に戻りましょう。まず、「栄子内親王和歌詠草」の「詠草」というのは和歌の草稿、下書きのことです。ここで作られている和歌は正徳元年（1711）の10月30日、栄子さんが39歳の年に、お母さんの新上西門院が60歳を迎えるお祝いである「六十の賀」にて杖をプレゼントした時に、その杖に添えるために詠んだ和歌であるということがわかっています。ここは三つのパートに分かれていまして、一番右には「杖」という歌題（和歌のタイトル）が書いてあります。その後、大きい文字が六行分ありますが、この前半の三行分が一首目の和歌で、次の三行分が二首目の和歌です。栄子内親王は、お母さんに杖を贈りますので、その杖を題にして、まず、二首の和歌を詠みました。最終的には一首の和歌を贈ることになりますので、このうちのどちらにしようか、とはじめに考えたわけです。このままでは読みにくいので、文字に起こしますと、こういう形になります。

杖

くれ竹のはがへぬ杖を
つくからに千世に八千代の
さかもこえなむ
としをへて生そふ竹の
ふし毎にかさぬる千世は
君ぞかぞへん

このうち一首目の歌について、どういう言葉を使って、どういう内容を詠もうとしているのか、栄子さんの気持ちを分析してみ

ましよう。一首目の歌は、はじめに「くれ竹の」とあります。「呉竹」は竹の種類です。この時プレゼントしたのは、おそらく竹を使った杖だったのでしょうか。他の言葉に目を移しますと、聞き覚えのあるフレーズがありませんか？ 第四句目、「千代に八千代の」というところです。日本の国歌「君が代」の中に「千代に八千代に」という言葉が出てきます。あの「君が代」の歌詞は、元をたどると『古今集』に遡ります。

「我が君は 千代に八千代に さざれ石の いはほとなりて
苔のむすまで」

『古今集』は全部で20巻あるのですが、その7巻目、お祝いの歌やおめでたい和歌を集めた「賀」という場所に入っている一首です。最初が「君が代は」ではなく「我が君は」という形になっていますが、これが元の形です。

この歌の「我が君」は歌を贈る相手を言っていて、その相手が「千代に八千代に」生きて欲しいと願います。「千代」も「八千代」も、長い時間を言います。それだけ長生きしてほしい。次の「さざれ石」は小石、「いはほ（巖）」は大きな岩です。小さな石が長い時間をかけて大きな石に成長するという伝説があって、それくらい長い時間をかけて、さらにもっと長い時間が経ってそこに苔が生える、とにかく「ながーく生きてくださいね」、それがこの『古今集』の歌の意味するところです。この歌の「千代に八千代」という言葉を使って、栄子さんも、お母さんに長生きしてほしいという思いをこめて歌を作ったのです。

このように、和歌は古い言葉をくりかえし、くりかえし使って

いきます。特に『古今集』は和歌の教科書ですから、その中に出てくる言葉を後世の歌人達はくりかえし使います。栄子さんからすれば、『古今集』は800年も前にできた歌集ですので、当然、栄子さんが普段話す言葉と『古今集』の言葉とは、全く違っています。しかし『古今集』などの伝統的な和歌の言葉を使う、それが和歌を成立させる条件の一つだったのです。

さて、実は栄子さんの歌にはもう一首、『古今集』の中の和歌が隠れています。それがこの歌です。

「ちはやぶる 神やきりけん つくからに 千歳の坂も 越えぬべらなり」

さきほどと同じく、『古今集』巻7、賀の歌の中にある僧正遍昭というお坊さんの歌です。遍昭さんは百人一首に別の歌が載っていますね。「天つ風 雲の通ひ路 吹きとちよ 乙女の姿 しばしとどめん」、あの歌を詠んだ遍昭さんの、また別の歌です。

実はこの歌も杖をテーマにした歌です。歌の中には「杖」という言葉は出てきませんが、長寿のお祝いに杖をもらった人の喜びを表現しています。この歌の意味は、「この杖は神様が切ってお作りになった杖なのであろうか。この杖をつくやいなや、千年もかかる坂も、たちまち楽々と越えてしまいそうですよ」と、杖のおかげで長い長い坂も越えて行けそうだ、ますます長生きできそうだ、と感謝の気持ちを示しています。

遍昭さんの歌の「つくからに」「越えぬべらなり」の部分が、栄子さんの歌にも「つくからに」「さかもこえなむ」と少し形を変えて出てきています。こちらに関しては古い歌をモチーフにし

て新たな歌を作る、いわゆる「本歌取り」という修辞を使っていることがわかります。おそらく栄子さんは、プレゼントする杖を題として歌を作る時に、「そういえば、『古今集』の中にも杖をテーマにした歌があったわ。あれを本歌取りしましょう！」と思ったに違いありません。とても機転の利いた工夫だと思います。

そして最後に残った「はが（葉替）へぬ杖」という部分ですが、これも和歌に使われてきた伝統的な表現です。あまり有名な歌にはないのですが、たとえば鎌倉時代の初めに生きた慈円というお坊さんの歌に見えます。慈円さんも百人一首の中に、「おほけなく うき世の民に おほふかな わが立つ杣に 墨染の袖」という歌が選ばれていますが、その慈円さんの別の歌です。「竹を植えて 友と成す」という題で、

「窓近く 葉替へぬ竹を 植ゑおきて 友無き宿と 人に言はれじ」

と詠んでいます。竹は冬でも緑色の葉っぱを持つことから「葉替へぬ竹（葉を替えぬ竹）」と表現されます。そこからさらに、竹は不老長寿を意味する植物としても和歌で詠まれます。慈円さんは「葉っぱが生え替わらず青々としている竹を家の近くに植えて 友達にしたぞ、もう人から「友達がいない寂しい人」だなんて言われぬぞ」と歌にしたわけです。栄子さんの歌は、この慈円の歌を意識したわけではないと思いますが、和歌に伝統的に使われた表現であったことはおわかりいただけたかと思います。

さて、こうしてできあがった栄子さんの歌の内容を見てみます。「葉が生え替わることのない、不老長寿のシンボルである呉竹。

その竹で作った杖をおつきになれば、千代に八千代の、長い長い坂も越えてゆけますよ、それくらいもっともっと長生きできますよ。このプレゼントの杖を使って、ぜひ長生きしてくださいね。そういう思いを込めた歌であるということがわかってきます。

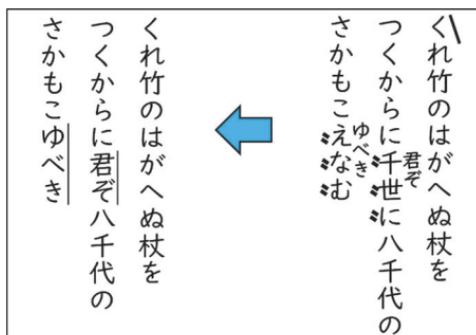
こうして見てみると、この栄子さんの歌の大部分が『古今集』やその他の古い歌に使われた表現でできていることがわかります。栄子さんが独自に編み出した個性的な言葉や、あっと驚くようなオリジナルな表現はありません。それでも自分の思いを載せて一首を作る、それが和歌です。

和歌の世界を「うたのみち」と書いて「^{かどう}歌道」と言いますが、これは「^{どう}道」というくらいで、個性やオリジナリティを発揮することを目的とした活動ではありません。茶道や柔道、剣道などのように、「型」を踏襲することが重要です。『古今集』や古い和歌から学んだ「型」をうまく使いこなして一首を組み立てることができるようになる、そこを目指して歌人達は日々稽古をします。

(3) 霊元上皇の添削

さて「二条家文書」の資料写真にもう一度戻ります。ここでは大きな文字の他に色々と書き込みが見えます。たとえば、右上の歌の冒頭部分には斜めの棒線が引かれています。また歌の二行目と三行目のまんなかあたりにも、右側に何か文字の書き込みがあり、その反対側には点々がいくつか見えます。実はこれは、和歌の添削を受けた時の書き入れです。栄子さんはこの和歌を作ったとき、父親である霊元上皇（この時、霊元天皇は讓位して上皇に

なっていました)から添削を受けています。霊元上皇は非常に和歌に熱心で高い技術を持っている人物でした。こうして添削を受けることも



非常に重要です。室町時代から江戸時代にかけての資料を見るとよくわかるのですが、人々は和歌を詠んだとき、自分の師匠にあたる人に和歌を見せて添削を受けます。そうして合格点に達した時に、はじめてその歌が完成したことになります。これは三十代とか四十代とか、それなりに年齢が上がっても続くもので、和歌を体で覚えるために常に実践的な訓練を続けていくわけです。

霊元上皇が書き入れた部分を左の方に付け足してみます。まず右上の棒、これは合点と呼び、合格のしるしです。栄子さんが詠んだ二首のうち、この和歌の方が、より良いと判断されたのです。ただし、いくつか手直しをする必要がある。それが二行目、三行目の書き込みです。文字が書いてある部分は「その文字に置き換えなさい」という意味で、左に書かれた点々は、元の文字が見えるようにしたまま削除する部分を示す、「ミセケチ」という記号です。すると、霊元上皇が添削した後の歌はこうなります。

「くれ竹の はがへぬ杖を つくからに 君ぞ八千代の さかもこゆべき」

せっかく栄子さんが、「千代に八千代」という『古今集』の表現を使いながら工夫して歌を作ったのに、その部分が削除されてしまいました。おそらく「千代に八千代の坂」という言い方が、文法的に少し問題があるという判断だったのではないかと思います。「八千代」だけでも長い時間を示しますから、いっそ「千代に」を消して「八千代の坂」だけでよい。その代わりに「君ぞ」ということばを入れて、「この杖をつくあなたこそが」ということをわかりやすくしました。また和歌の末尾も「こえなむ」から「こゆべき」に変えています。実は「さかもこえなむ」と「さかもこゆべき」は、どちらも同じように「坂をきつと越えてゆくだろう」「坂を越えられるはずだ」といった意味になるので、あまり変更する必要はないようにも思われます。これについては私も確信がないのですが、調べてみますと、「君」に「ぞ」をつけて「君ぞ」と力強く表現する言葉を使う歌では、その末尾に「べき」という言葉がつくことが多く、逆に「なむ」というやわらかい言葉が後ろに来るパターンは、ほとんど見つけられませんでした。

例としてこんな歌があります。源実朝、この人も百人一首に歌が選ばれていますが、その人の歌、「千々の春 よろづの秋にながらへて 月と花とを 君ぞみるべき」

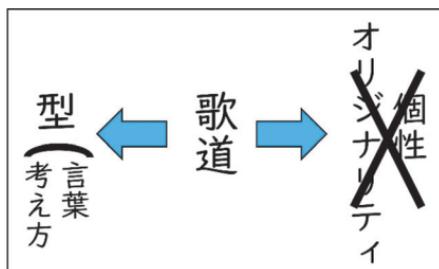
これもある人の長生きを祈るお祝いの歌のようです。「幾千の春、幾万の秋を越えて長生きをして、それだけくりかえし、くりかえし、美しい秋の月と春の花とを、あなたこそがきつとみることでしょう」と詠んでいます。この「君ぞみるべき」、「あなたこそがきつと見るのです」という力強い表現が、お祝いの歌の調子

として好まれたようです。ややこしい話をしてしまいましたが、おそらくは経験豊富な靈元上皇だからこそ、細やかな表現上の添削が加えられた結果、末尾の「こえなむ」が「こゆべき」になったのだと思います。

こうした手順を経て和歌は生まれます。恐らくこの最終バージョンが、栄子さんから母親の新上西門院へと贈られたものと考えられます。新上西門院も勉強熱心で、たとえば「二条家文書」の中には、『伊勢物語』や、『源氏物語』の和歌の部分を新上西門院が書写した資料も残っています。栄子さんが詠んだ歌に『古今集』の和歌の言葉が用いられていることにも、きっとすぐに気づいたでしょうし、この歌が杖をテーマにして長生きして欲しいという思いを表したものであることもわかったと思います。和歌に親しんだ人達だからこそ可能になる深いコミュニケーションの形といえるのではないのでしょうか。

さて、ここで問いに戻ります。「和歌はどうやって作られていたの？」ですが、和歌を詠むためにはまず、言葉の使い方、歌語や文法をしっかりマスターする必要があります。そしてまた物事の捉え方や考え方、これらは「本意」とよびますが、さきほどの例で言えば「竹は不老長寿の象徴である」とか「杖は、千代も八千代も続く坂を越えていくための長生きの象徴である」とかいったことです。これらは、古典を勉強したり、師匠から添削指導を受けたりして学んでいくことで型を身につけることになります。図をご覧くださいと、この左の「型」というのが、具体的には「言葉」と「物事の考え方」になるわけです。これらを学んで、

それを使いながら和歌を作る、というのが歌道の重要なポイントということになります。和歌がどうやって作られるのか、おわかりいただけただけでしょうか。



3 和歌の面白さって何？

最後に「和歌の面白さって何？」という問いについて考えたいと思います。和歌を作るためには型が必要ということを行いました。実は日本の伝統文化の中には、この「和歌の型」に基づいた考え方が無数にちりばめられています。現代の日本文化の中にも、注意してみると和歌的な要素をあちこちで見つけ出すことができます。たとえば、「春になると鳴く鳥」「春を告げる鳥」といえば、ホーホケキョと鳴く鶯を思い浮かべる方も多いと思います。今、画面には、私が同志社大学のキャンパス内で撮影した鶯の画像を表示していますが、この鶯の声を、我々は春の訪れのしるしと考えます。これも実は和歌の中でくりかえし、くりかえし言われてきたことです。たとえば『古今集』に次の歌があります。

「春のはじめの歌 壬生忠岑

春来^きぬと 人はいへども うぐひすの 鳴かぬかぎりは あら
じとぞ思ふ」

春が来た、とみんなが言うけれど、鶯の声を聞かないうちは、僕は春がまだ来ていないと思うよ。鶯の声を聞くことで春が来たことを感じる、そういう考え方が見られます。これがカラスの声とかスズメの声とかトンビの声にはならない。それが「型」というものです。

この「型」は、時代が下っても同じように和歌に出てきます。たとえば『古今集』成立から800年後の霊元天皇は、こんな歌を詠んでいます。

「うぐひすも ^{ももよろこ}百喜びの 声添へて 我が待ちえたる 春^{をし}教ゆらし」

鶯も、春の喜びを感じさせる声をあげて、私が待ちに待っていた春の訪れを、今教えてくれたよ、という歌。霊元天皇もまた、鶯は春の訪れを告げる鳥なんだという「型」を身につけていたわけです。そして現代の我々も、「春の鳥」と言えば「鶯」とすぐに連想する。知らないうちにそういう「型」を受け継いでものの見方を学んでいます。もし和歌の世界で鶯がここまで注目されてこなかったら、私たちは鶯の声に対して、これほどまでに風情や趣きを感じなかったと思います。自分一人では見つけられなかった、ものの見方や楽しみ方を教えてくれる。そういう面白さが和歌にはあると思います。

さらに大きな話をしてみます。和歌にはたくさんの「型」があり、その「型」をたくさんの人々が踏襲していく。みんなで和歌を勉強して「型」を身につけ、自分でも作って楽しむ。そうすると、その人達の中に共通する価値観に基づいた文化、というもの

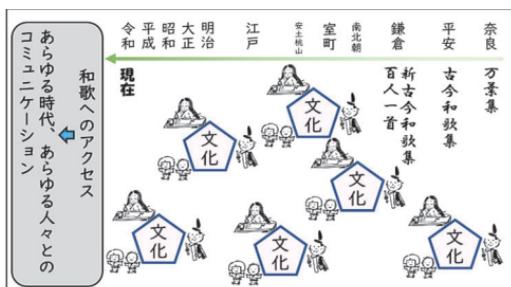
が生まれてきます。

たとえば平安時代に作られた『古今集』、そこには当時の人々が共通して持っていた価値観に基づく「文化」が込められているわけで、それを使って鎌倉時代の人も和歌を学び、室町時代の人も、江戸時代の人も同じように和歌を学んでいく。そうすると、どの時代にも和歌を共通理解とした文化が受け継がれていきます。逆に言えば、和歌を通して、現代の私たちは平安時代や鎌倉時代を生きた昔の人達と同じ価値観を共有できる、限定的な形ではあるとしてもコミュニケーションが取れるのです。

たとえばさきほど『古今集』を間に挟むことで、栄子内親王ともコミュニケーションをとることができましたよね。栄子さんは何を考えているんだろう、あ、なるほど、この歌にはこんな思いが込められていたんだな。そういうことを可能にするのが、何百年もの間、ほとんど形を変えずに生きた文化として残されてきた、この和歌というものだったわけです。

つまり和歌に触れる、和歌へアクセスするということは、あらゆる時代、あらゆる人々とのコミュニケーションを楽しむということだと思います。

現在では和歌を作る人というのはごく限られた人数にはなってしまいました



が、和歌を見て理解するだけでも、ある程度は昔の人達とコミュニケーションが取れると思います。たとえば『古今集』であれば、文庫本でも丁寧な解説や現代語訳の付いたものがすぐに手に入ります。ぜひこれを機会に、和歌を通したタイムトラベルへと出発してほしいと思います。良い旅を！

以上で私の話を終わります。ありがとうございました。